

第 29 回 歴史リレー講座「鑑真和上の足跡をたどる」 西山 厚氏 (H29.2.19)

今回は、奈良時代、幾多の困難を乗り越えて中国から日本に辿りついた鑑真についてお話しします。鑑真は 688 年、唐の揚州生まれ。ある仏像に出逢って深い感銘を受けたことが出家のきっかけになり、14 歳で大雲寺に入りました。その仏像をモデルに造られたものが京都の清凉寺にある国宝釈迦如来像です。

仏教では出家の際、受戒という儀式で 10 人の師に戒律遵守を誓います。当時の日本には正しく授戒を行える僧がいなかったため、742 年に中国留学中の日本人僧、栄叡ようえいと普照ふしょうが大明寺に鑑真を訪ねて弟子たちの渡日を要請しました。当然、充実した日々を放棄してまで遠い日本へ渡ろうという弟子などいません。しかし、鑑真の「ならば、私が行こう」のひと言で弟子たちは随行を決意。この瞬間から鑑真たちの長い苦難の日々が始まったのです。

当時の中国において海外への渡航はご法度。鑑真は「天台山国清寺へ供養に行く」と偽り、法を犯してまで渡日計画をたてます。ところが、乗船前に「海賊と通じている」と密告されて捕縛（のちに誤解が解けて釈放）。2 度目は出航後ほどなく難破し、3 度目も密告のため失敗。4 度目、今度こそ天台山に向かいますが、渡日を快く思わない弟子の密告により挫折。5 度目は揚州から揚子江へ出たものの南方の海南島へ漂流し、揚州に帰る途中で栄叡が力尽き死亡。一方、普照も悩んだ末に鑑真の元を去りました。度重なる困難からその身体にも異変が生じ、伝記『東征伝』には「63 歳で明を失せり」と書かれています。

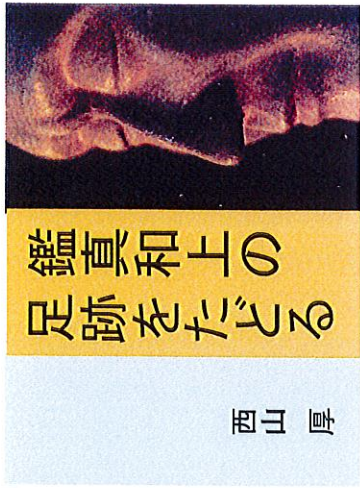
そんな鑑真にまたとないチャンスが到来します。前回の遣唐使から 20 年後の 752 年、再び日本から遣いがやってきたのです。鑑真の熱意に心打たれた藤原清可ふじわらきよかは帰途につく第一船に鑑真を内密に乗せました。しかし、やはり法を犯すことは出来ぬと鑑真らを下船させます。これに激怒した大伴古麻呂おおもものこまろは鑑真らを第二船に移し 11 月 16 日に出航。ところが、清可の第一船はベトナムに流され遭難。この船には前々回の遣唐使阿倍仲麻呂も同乗していました。そして 12 月 20 日、鑑真ら総勢 25 人を乗せた第二船は鹿児島島の秋妻屋浦に到着。博多湾から大宰府に入った一行は、瀬戸内海を経由して大和川を遡り王寺を過ぎ、龍田越えで都に向かったと考えられます。東大寺到着は翌年 2 月 4 日。4 月には大仏殿にて聖武天皇に授戒を行いました。

ここで鑑真の失明に関する、私なりの疑問点を挙げていきます。鑑真の日本での仕事は一切経の誤りを正すこと、諸々の薬物を分類することでしたが、光を失っていたはずの鑑真にこのような高度な作業が可能だったのでしょうか。しかも、当時の史料には盲目であることへの労わりの言葉や配慮が一切見られません。いったい鑑真は本当に盲目だったのか？首をかしげざるを得ません。

私はかつて、代筆とされる鑑真の手紙を研究したことがあります。当初は弟子の法進あるいは思託の代筆かと推測しましたが、実物を見るやいなや代筆自体への疑問が生まれました。師匠である鑑真の「真」が次の文字と繋がっている。弟子が代筆したなら、師匠の名をそんなふうに書くだろうか…。そうかといって、のびやかな筆運びを考えると、盲目（？）の鑑真自身が書いた可能性もほぼゼロでしょう。そもそも、「鑑真失明」の拠り所である『東征伝』は元々は思託が書いたものを、おもしろみに欠けるという理由で淡海三船という日本人が脚色して書き直しています。私は、渡日後も鑑真は目が見えていたと考えています。

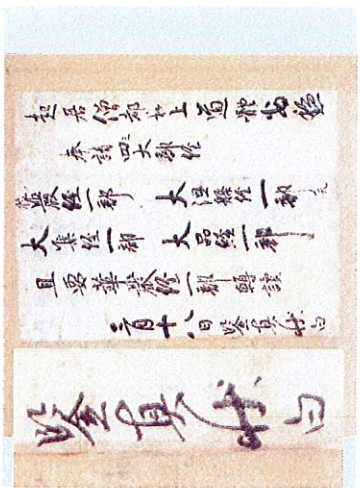
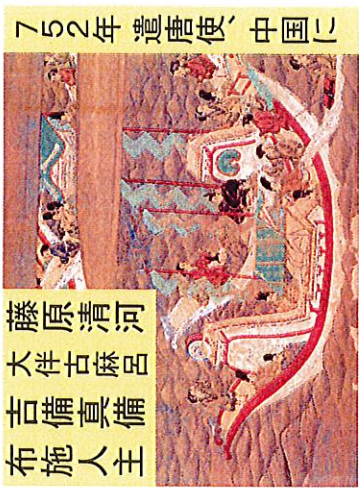
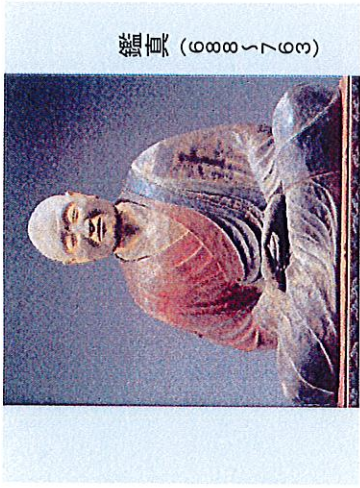
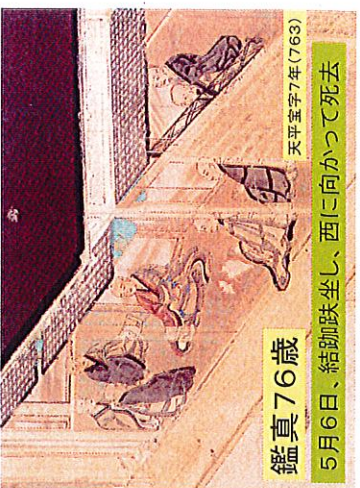
さて、鑑真が平城京に造った唐招提寺は珍しく講堂（僧が勉強する場）から建立されました。鑑真の仏教への真摯な想いが伝わってくるではありませんか。そして渡日 10 年後の 76 歳で西に向かい結跏趺坐して死去。師の姿と想いをこの世に留めるため、弟子によって同寺にお身代わり像が造られました。かすかな微笑みとともに目を閉じていることから、晩年には失明していたようです。

鑑真はなぜ度重なる失敗を経ても渡日を諦めなかったのでしょうか？挑戦し続ける原動力は何だったのでしょうか？これらを問い続けることが鑑真へ近づく第一歩だと私は思います。



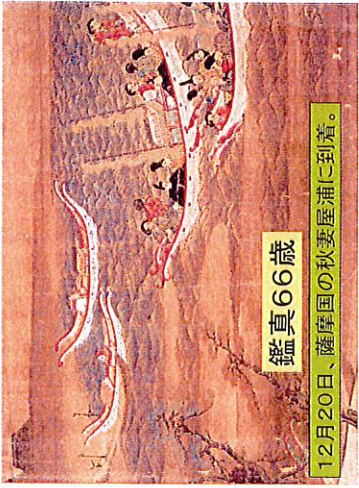
栄叡と普照、
来日を願う
授戒の師を招きたい
弟子たち、拒絶する
日本は遠い
百度行こうとしても
一度も着けない
では私が行こう
なぜ？

一切経の
誤りを正す
「暗(くら)に誦(よ)して」
諸々の薬物を
分類する
「曇(と)を以て別(わか)こ」



稍生難視之想
ようやく難視の想を生じ
権隠双樹之陰
かりに双樹の陰に隠る
『招提寺流記』

戒律の講座を
開くこと、130回
授戒した弟子は
4万人
寺を建て、
仏像を造り、
貧民や病人の
救済事業をおこす



『東征伝』
「明を失せり」
思託
淡海三船
(真人元開) 書き直す

